

印度通史

フロロラ、スチール著

India through the ages. By Flora A. Steel.

London, 1908, 8° pp. 382.

印度史は専門家の參考となるべき大著あり、又一代を限り之を詳述せる良著も亦少からざれども、

印度古代の通史にして、一般讀書家に供給し、或は中等又は専門學校の學生用となすべき程度の書至て少し。本書は此必要に應ぜんが爲に公にせられしもの、如し。此書に全體を三編に分ち、第一編に於て古代史を論じ、西紀前二千年より西曆第十世紀に至り、第二編に於て中世史を叙し、第十一世紀より第十八世紀の初に至り、第三編近世史を説き、第十八世紀より第十九世紀に至る。著者スチール夫人は印度の史實を論ずるに當り、婉曲の筆を以て巧に其變遷を叙したれば、中等程度の印度通史として一般讀書界に歓迎せらるべし。

(堀謙徳)

明帝靈夢遣使傳説考

エム・アツシユ・マスベロ述

Le Songe et l'Ambassade de l'Empereur Ming. Étude critique des Sources.

Par M. H. Marpero.

佛教傳來は支那史上の一大事實なり、抑も佛入滅して二百年、阿育王佛教の傳宣に務め、四境の民種普ねく法雨に洽はざるなし、支那又年ありて其の遺響を傳ふ、傳へ云ふ、秦始皇の初(西紀前二一七)沙門室利房等十八人西域より至る、帝其異俗を惡みて獄に下すや、金剛神乃ち碎て出てしむ、これ佛教を知れる初なりと、或は列子に丘聞西方有聖者云々と云ふを以て、早く已に佛の在世を知れりとし、又西漢武帝、霍去病の匈奴に得たる金人を甘泉宮に列し、燒香禮拜せるを初めとし、或は張騫の大夏に至りて身毒浮圖の教あるを知り、或は成帝の時、劉向書を校して内已に佛經ありしを傳へ、又哀帝の時、景盧(秦景又秦)

(慈) 丹氏に使用して、佛經の口授を受けたるを以て、佛道流入の初となす如き、凡そ傳ふる所六種の説ありと雖も、何れも佛敎の已に早く傳來せしを傳ふるものにして、或は悉く斥く可く、或は採りて以て考ふべきものあり、されど一般に佛敎初傳の年として信ぜらるゝは、東漢明帝の永平十年(紀元二八六七)なりとす、左に其の梗概を記さん。

明帝永平三年(又云四年、又七年)帝夢に丈六金人の項光を佩ひ、飛びて殿前に至るを見る、且日之を異とし群臣を集めて之を問ふ、時に道人傅毅なるものあり、奏して曰く、聞くならく天竺に道を得たる者あり、其の名を佛と云ふ、輕舉飛行し身に光明を佩ふ、之れ恐らくは其の神ならんと、帝悟り、仍て中郎蔡愔同秦景博士王遵等、十八人をして往て佛を請ぜしむ、使者天竺に至りて迦葉摩騰 (Kasyapa) 竺法蘭 (Dharmaraksas) の二沙門を得、又經像を寫取して漢地に歸る、帝よりて白馬寺を建つ、時に永平十年な

り、尤も法蘭は學徒の爲めに阻まれ、後間行して洛陽に至り、共に齋らす所の聖經を譯出せり、これ支那に佛經沙門の入れる初めなりと。

「明帝靈夢遣使」の説は、佛敎傳來説中最も弘く信用せらるゝものにして、之に關するマスペロ氏の研究は、實に佛敎傳來に關する從來の説に光を添ふるものなれば、今左に其の概要を紹介すべし、説は載せて昨年(一九一〇)の佛蘭西東洋學報 (Bulletin de l'École Française d'Extrême Orient, Tome X, No. 1.) にあり。

氏は先づ、此の傳説の久しく嚴密に信憑せられしにも拘らず、新資料の比較はこれが權威の失墜を來せるを云ひ、佛敎思想流入の早く西洋紀元の初めにあるを信じ、明帝遣使の後、皇弟なる楚王英が篤信の事實を是認すると共に、明帝遣使の結果至れる沙門を最初のものとなすを難し、正史編者の典據を疑ひ、靈夢遣使の研究の必要を説き、其の傳説の典據を

確かめんとせり、乃ち材を隋唐以前に秉り、此を凡そ年代順に配列せり。

一、四十二章經序、二、牟子理惑、(弘明集)

三、吳書、(廣弘明集、集古今佛道論衡、同續論衡、法苑珠林、釋迦方誌)

四、化胡經(廣弘明集甄鸞笑道論出) 五、後漢紀(後漢書)

六、後漢書西域傳、七、冥祥記、(寶感通錄)

八、出三藏記集、九、高僧傳、

十、水經注、十一、洛陽伽藍記

十二、漢法內傳(集古今佛道論衡、同續論衡、魏書釋老志)

氏は是等の諸書に逐次周密なる批判を加へ、以て其年代を定めたり、今その原文の主なる一二を掲げば左の如し。

I、四十二章經序、

昔漢孝明皇帝、夜夢見神人、身體有金色、項有日光、飛在殿前、意中欣然甚悅之、明日問群臣、此爲何神也、有通人傅毅、曰、臣聞天竺有得道者、號曰佛、輕舉能飛、殆將其神也、於是上悟、即遣使者張騫(元板作蔡愔)、羽林中郎將秦景、博士弟子王遵等十二人、至大月支國、寫取(無取字)佛經四十二章、在第十四函中、登起立塔寺、於是道法流布、處々建立佛寺、遠人伏化、願爲臣妾者、不可稱數、國內清寧、含識之

類蒙、受賴于今不絕也。

II、牟子理惑、一云蒼梧太守牟子傳傳

問曰、漢地始聞佛道、其所從出耶、牟子曰、昔漢孝明皇帝、夢見神人、身有日光、殆將飛在殿前、欣然悅之、明日博問群臣、此爲何神、有通人傅毅、曰、臣聞天竺有得道者、號曰佛、飛行虛空、身有日光、殆將其神也、是於上悟、遣使者張騫(同作中、鄭蔡愔)、羽林中郎將秦景、博士弟子王遵等十八人(八字同)於大月支、寫佛經四十二章、藏在蘭臺石室第十四函、時於洛陽城西雍門外起佛寺、於其壁畫千乘萬騎繞塔三匝、又於南清涼台、及開陽城門上作佛像云々、明帝時預備造壽陵日顯節、亦於其上作佛圖像云々、(下略)。

VI、化胡經

上略漢明帝永平七年甲子歲、星畫現西方、夜明帝夢神人、一丈六尺、項有日光、且問羣臣、傅毅曰、西方胡太子成道號佛、明帝即遣張騫等窮河源經三十六國、至舍衛、佛已涅槃、密經六十萬五千言(氏作六、至永平十八年乃還)。

V、後漢紀

初帝夢見金人長大、項有日光、以問羣臣、或曰、四方有神、其名曰佛、其形長大、陛下所夢得無是乎、於是遣使天竺、問其道術、遂於中國而憫其形像焉。

VII、冥祥記、

初南齊王瑛冥祥記云、漢明帝夢見神人、形垂二丈、身黃金色、項佩日

光、以問群臣、或對曰、四方有神、其號曰佛、形如陛下所夢、得無是乎、於是發使天竺、寫致經像、表之中夏、自天子王侯、咸敬事之、聞人死精神不滅、莫不懼然自失、初使者蔡愷、將西域沙門迦葉摩騰等、齋優填王畫像釋迦倚像、帝重之如夢所見也、乃遣畫家圖之數本、於南宮清涼台及高陽門顯節壽陵上供奉、又白馬寺壁畫千乘馬騎繞塔三市之像、如傳備載（法內傳）。

扱而以上の十三種の資料に就きて年代を調らぶるに、先づ四十二章經は支那最古の佛典にして、摩騰法蘭の新譯となすとの信ずべきは、其書名と共に章句の、襄楷奏文（桓帝延熹九、一六六）中、及牟子理惑に引けるを以て認むべし、されど經の古きを以て直ちに經序亦古しとはなし難し、出三藏記集、經序首末、及牟子と比較するに、經序の明帝を去ること遠き作にして、第五世紀以後に下らずとも、第二世紀末以前のものなる事疑なし、牟子は P. Pelliot 氏典籍考に従ひ、其の卷頭の序文によりて第二世紀末造の作なりとすべし、マスペロ氏は更に進んで序文を精細に考證し、後漢書三國志を比較して詳かに其の時代を定

めたり、蓋し桓帝の時、陶謙の配下に笮融なるものありて、曹操の爲めに彭城より逐はれ（初平四年、廣陵に太守を殺し、豫章に入りて又太守朱皓を殺せるより、交州刺史朱符同郡の劉彥をやりて之を討てることあり、而して序文に蒼梧太守より仕官を勧めらるゝも遂に就かざりしとの事も見えなれば、牟子は二世紀末の處士にして、理惑論三十七篇は其頃なれるものならんと云ふにあり、（マスペロ氏理惑としたとすし）

次は、牟氏は吳書は第三世紀後期中葉なる（吳天章曜の撰なれども、廣弘明某等引く所の吳書に、晋惠帝（三〇六年）の興せる興聖寺の記事あるは年代に矛盾ありといふべきなり、之を漢法本内傳に比するに兩者甚だ相似たれば、その作出の先後を確むるの必要ありとなし、次に化胡經（晋王粲、三〇）後漢紀（袁宏、三六七）冥祥記（南齊王琰、建元元年、四七九作）を詳述し、又梁僧祐の出三藏記集の年代を正して、南條氏及三寶記唐經錄の説を

排し、集中天監三年譯出の經文及法苑雜錄を載せた
 のみならず、阿育王經(十二年譯出)を載せざるの故を
 以て、記集を天監五年乃至十一年の作(五〇六)なり
 とせり、(勝眞按するに、三寶記記集の編述を天監年間におく、唐
 内典錄又同じ、マ氏が齊建武年間に係りたりとなすは誤
れ)次に、漢法本内傳は道教に對し現はれしものにし
 て、佛教傳來につき記すること詳なれども、紀元
 後五二〇以前の作とは思はれず、東都に於ける道佛
 激争の際佛家の典據とせるものなれども、其のいふ
 所尤も信じ難し、其の摘試の記事の如きは、荒誕無
 稽殆んど信を措き難ければ、唐初の道士尹文燥の如
 きは之を以て羅什門下の僞作とせり、(翻譯名義集)、而し
 て傳中に引ける中玄步虛章は、魏宣武帝の時代のも
 のなれば、その六世紀以後の編述たるや論を俟たず。

結論

マスペロ氏は是等の資料に如上の批判を加へ、資
 料相互の連絡關係を明かにして、其の系統を明かに
 せんとせり。

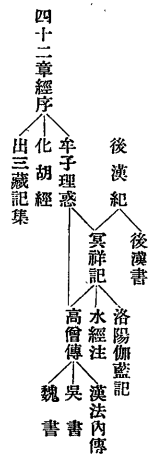
先づ吳書の文面を見るに、其僞書たる性質を明か
 に曝露せり、唯興聖寺の記事のみを以てするも、吳書
 が韋曜の編せる者を其儘に傳へたりとは見難し、又
 文中漢法内傳より剽竊したりと思はる、辭句相踵げ
 り、こは法内傳の記者が吳書の文面を分解して之を
 借用したりとは見難し、その摘試の一段の如きも亦
 同じ、蓋し吳書の一部は法内傳を改作せるものなる
 べく、その完全なる句章は僞作なるべし、又記事の
 首段に康僧會の傳あるは、高僧傳より採りしこと疑
 なし、蓋し所謂吳書なるものは六世紀の後半(恐くは
 吳書に踐欠を生ぜる後)法内傳に確憑を與へんが爲
 め吳書、法内傳、高僧傳を編輯して作られたるもの
 して、典據とす可き價值あるを認むる事能はず、之
 と共に後漢書も亦後漢紀の騰寫の故を以て排斥せら
 れざる可らず、

次に、四十二章經序文と牟子理惑とを比するに、
 牟子は最も完全に白馬寺建立佛像將來の事實を傳へ

たり、經序の引用は五世紀の末にありと雖も、四世紀の末已に化胡經に之れを參考せる跡あるを以て之を見れば、其の頃既に存せしを認む可く、しかも四世紀の末には牟子未だ出でざれば、これが經序に引用せられし事なけん、要するに牟子は經序に出で、後半は其添補に過ぎざらん。

次に三藏記集及化胡經は、共に經序の省略寫抄にして、後者は唯細部に多少の異同あり、年代、舍衛國及將來の經典を誇張し、(尤も原文には八萬六千言とあれどもマ氏之れを六十六萬卷とせり) 佛像立寺の事なし、冥祥記は初段に後漢記を探り、次に牟子を取りて少しく精粗の差あり、但乃明帝の使者の二沙門を伴ひ還りしを傳へしは此書に初まる、(マ氏感通錄を讀み、其の所引の冥祥記と共に道宣の言をも記の本文と思惟せしが爲め、氏の言あるに至れり、記の文は聞人死精神不滅莫不懼然自失までにして初使、者云々以下は道宣の注なり、混同すべからず)、水注註は實に其の轉寫しにて、伽藍記亦之に類せり、高僧傳に至りては冥祥記牟子を典據として文同しからざるもの、摩騰の傳は冥祥記に據り、佛像將來の記事は牟

子に依れり、漢法内傳(正しくは漢法本内傳)に關しては、帝夢以內二沙門到來の辭句は摩騰傳に従ひ、其の年代及び占夢の條に傳毅の外王邊を出せるは、周異記を云はんか爲めに外ならず(但し佛道論衡に此の事なく、唯、但纏佛道論衡に王邊周異記を語る)、但だ道士沙門摘試の條は編者の創意に出でしものなれども、こは唯本書が二家激争に際して成れる護法論書なるを示すのみ、仍て以上の諸書の系統を示せば左の如し。



更に考ふ可きは經序と後漢紀なり、兩者を比するに、後者必しも前者の寫抄にあらず、然らば全々獨立せりやと云ふに、亦必しも然らず、假令言々句々に相似の點なくとも、尙互に相據る所なきに非ず、後漢紀には占夢者及使者の名を擧げざれども其の他の記事は互に關係あり、又共に立寺の事なく、唯使

者歸洛を以て記事を終れり、かくて辭句の類似はな
くとも思想の一致あれば、二者の獨立は許す可らず
して、後者が前者より出でたることを認めざる可ら
ず。

之を概言すれば、經序は帝夢遣使の事實に對し
前掲諸資料の淵源にして、首段に於て經序を承けた
る牟子は佛像立寺に對する後の憑依なり、唯冥祥記
高僧傳の經序に出でて添補あるを異なりとするの
み、但し牟子は冥祥記の出づる(九七)前數年に於て
僅かに法論目錄(宋明帝泰始中、四六五
一四七一陸澄撰十四卷)に現はれしまで
は、二世紀間全く世に知られざりしが如し。

次に傳説の内容を審査するに、諸書所依一なりと
雖も互に異同ありて一致する所なし、(一)、年代につ
きては、傳説の源となれる二書共に「昔漢孝明皇帝」
の時として其年を明かにせず、高僧傳に至りて初め
て永平の年號を加へたり、なほ諸書(化胡經、漢法本内
傳、年歷帝紀、歷

代三寶記、辨正論、佛國歷代
通載、資治通鑑、佛祖統記)

陶隱居年歷帝紀(永平十一
年、六八)及法内傳(永平三
年、六〇)を除けば、
其の年代は

1、六一 A.D. (永平四
辛寅) 夢……六四 A.D. (永平七
甲子) 使者歸還
II、六四 A.D. (永平七
甲子) 夢……六七 A.D. (永平十
丁卯) 使者歸還

の二系中に納むべし、思ふに二系の本源は一にして、
第二系の永平七年は第一系の使名歸還年代と共に、
干支の周紀の初を以て佛教初傳の年に當てたり、さ
れども佛教傳來の年代は此の如くにして諸書一致を
欠き、一方に帝夢に係けたる年を、他方には使者歸
還の年に係けたり、而して第六世紀の末、一般に信
ぜられしは第一系の説にして、且つ其古説なるとは、
四世紀頃已に甲子を以て物の初とするに基づけると
化胡經にて知るべし、第二系は隋唐以後の説なり、
故に是等の年代は佛教初傳の事實に對しては、さし
て重要な關係あるものにあらず、畢竟かの化胡經
が、使者の往復に十二年の年緒を與へしは、西域交
通の祖なる張騫の西域に使せる年數を、其儘佛教將

來の事實に宛てたるものにして、むしろ牟子後漢紀の年代を言はざるを優れりとす。

(二) 使者につきては、經序に之を張騫とす、これ明かに時代錯誤なり、後人此に留意し、高僧傳等多く改めて蔡愔とす、經序の時代錯誤は固より論なけれど、張騫とあるを正とすべし、元板の經序には蔡愔とあれども是れ編者の改訂に過ぎず、張騫の名已に古しとせば、蔡愔の名は蓋し牟子に初まれるなるべし、尤も麗板弘明集の牟子には蔡愔とあれども、宋板には張騫とあり、化胡經又同し、而して冥祥記は牟子によりて蔡愔となし、高僧傳法内傳等又之を承けたり、牟子に蔡愔とせるは法論目錄に認められたる時、時代錯誤を生ぜしより起れるにて原文の張騫は經序を受けたるなるべし、但し世說新語此名なく、副使の名のみを擧げたり、而して甄鸞は笑道論に於て、化胡經の佛典に出でしを嘲るに時代錯誤を以てしたれば、五七〇年頃此の名の已に當時の傳説中

に存せしを知るべし、而して牟子は如何なる資料を以て經序を補へるか詳かならざれども、王景(章帝時代)の金人論は、其名の示す如く明帝の夢を云へと明かにして、通載亦之を認めれば、牟子或は之に據りしにあらざるか、若し此の際に建寺及張騫の名の正しさを云へるものあらば、必や僧俗共に之を云はざる事なかるべし、惟ふに第三世紀の擾亂と、古書の擲滅は此の間の消息を明かにするものならん、少なくとも牟子は、當時支謙の如く、洛陽より南方交州に逃れ來れる一沙門の手記に依りて經序を補ひしものにあらざるか、兎も角佛教初傳を完全に傳へしは牟子にして、後段に將來の佛像及建寺の事を云添へたれば、牟子は大體に於て異なる二つの資料より成れると共に、

(一) 支那最古佛經の紹介(經序)と(二) 最古の佛像佛寺の紹介との二部より成れるを認む可く、即ち佛典先づ至りて、佛像次に傳はり、而して建寺の事ありし

を云へるは、一舉して支那に三寶の傳來を説くものなり。

(三)、傳説初段に見えたる朝臣の名は、其の實在を認め難し、通人傳毅は章帝の時初めて召されし人、張騫は已に二百年前に死せり、秦景は虚構に非ずんば時代錯誤にして、蔡愔王遵につきては考ふべからず、尤も蔡愔の名は後世の改訂なり、而して明帝は前漢末以來六十五年、交通絶えたる西域に漢の威令を布ける天子なれば、張騫の名を現はし來るも寔に故ありといふべし、蓋し張騫は西域孔道の開祖なれば、佛教傳來して西域通ぜるを云はんの料なるべし、王浮が化胡經に使者往復の期間を十二年としたるも故ありといふべし、且つ傳毅は竇憲の史官として匈奴征伐の軍に従ひし人なれば、帝及張騫共に何れも西域に關係深き人のみを網羅せるなり、但し之を以て佛教傳來に關係ありし人と見ること能はず。

人名既に信ずべからざれば、遣使の事亦疑ふべ

し、當時西域大に亂る、思ふに此の如きの遣使やあり得べからざらん、先是莎車于闐匈奴互に戰亂相見え、西邊を犯す事急なりしも、遂に漢は伊吾廬を取りて此に屯田し、後班超の勢力によりて僅かに西域を統御せり、茲に於て西域絶してより六十五載、復通するに至りぬ(永平十、六年)、されど帝崩じて西域又亂れ、都護陳睦を殺せり、されば遣使に關する重要文書なき限りは此事信ず可らず、凡そ傳説は一世紀を經ればその特徴を變ずるものなれば、此の傳説も同じく一つの説話にして、恐らく魏略の變形に過ぎざるべし。

(四)、佛像立寺の事も亦信を置く可らず、此に云ふ佛像に對する話の如きは極めて普通にして、優填王(Udayana) 第四像となすことども、于闐と共に聖地たらしめんとする爲のみ、白馬寺建立も重要なものにあらず、白馬經を負て至れるより此の名を得たりとするは老子青牛の説に連關し、極めて巧緻の説な

り、冥祥記は之を傳へし初めなり(此の事冥祥記の本末に
見えず、梁高僧傳には、
元と招提と云ひしを外國王寺塔を毀たんとする時白馬塔を、
續りて鳴きし爲め之を止めしより白馬寺と改むる事見ゆ)

以上述ぶる所によりて此の傳説を分解せば、左の

三段あり。

一、明帝の夢、使者、及佛典傳來し教法弘通せし
事(經序)

二、牟子は白馬寺佛像の傳を補足す、

三、此の傳説第四五世紀の間に確立し、二沙門至
れるを認め、白馬經を負ひ佛像を齎らし、勅
命によりて像を圖せしめし事(冥祥記)

要之佛敎傳來の説話は第二世紀の終期に成れるも
のにして、牟子の未だ出てざる間は、魏略之を異な
る形に於て傳へたり、魏略の據りし資料は明かなら
ざるも、其の記事は信ず可し、即ち、明帝時代に歸
するの傳説は信ずべからずして魏略の説寧ろ信據す
べきなり。

(三月卅二日稿)

大谷勝真)

數字發達の比較

チャールス・ウッドルフ述

The Evolution of Modern Numerals
from Ancient Tally Marks. (The
American Mathematical Monthly, Vol. XVI,
August—September 1909.)

數詞を表はす文字の起源に關する研究は重大なる
問題なるも、從來未だ是認せらる可き解釋をなせし
ものを見ず、これが學説を提供するもの少なしとせ
ざるも、反て其の間に調和を缺けるの觀ありき。數
字の由來に就いては、西曆九世紀以前に亞拉比亞人
が之れを印度地方より、とり入れて十世紀に之れを
歐洲に傳へたるなりとなし、此れ以上に遡りて其
の古き起源の發見せられたるものあるを聞かず。後
世の希臘人及ヘブリユウ人は各其の國語のアルファ
ベットの第一字を以て其の數の單位を示し、第二字
を以て其の十位を示し、第三字を以て百位を示
せり。或は又屢或る數字の稱呼の第一字を以て其